

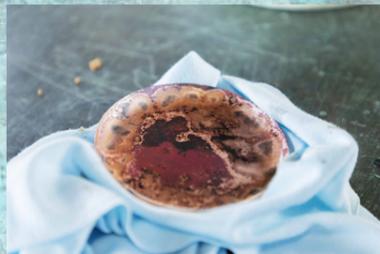
高岡銅器 / 着色体験 モメンタムファクトリー Orii



やすりで磨いた銅板トレイに糠（ぬか）を塗りつける。このあとの焼く工程で、糠の塩分などが銅と反応して模様を生み出すという。



スタッフの方と一緒にバーナーをしっかりと握り、トレイに向かって炎を吹き付ける。大きな音を立てながら炎が噴出された。



焼いたトレイから焦げた糠を落とす。このときの糠の焦げ方によって、銅板トレイにはさまざまな種類の模様ができる。



水色の薬品を布にしみ込ませてトレイに塗りつける。これにより緑青が発生し、赤褐色のトレイが徐々に青みを帯びてくる。



溶液が入ったタンクが登場。その側面を叩くとアンモニアが立ち昇ってくる。注ぎ口にトレイをかざすと、青みが強くなって完成。

富山県高岡市の閑静な街並みの一角に、銅製品の着色で躍進を続ける会社「モメンタムファクトリー・Orii」がある。1950年に「折井着色所」として創業した同社は、美術工芸品から仏具まで、数多くの銅製品の着色を手がけてきた。

工場を案内してくれた取締役の櫻野祐一氏が、高岡銅器や「Orii」の歴史を丁寧に紹介してくれた。会社の売上げが半減していた90年代末、3代目社長・折井宏司氏は自社の着色技術を使ったオリジナル商品の制作を模索していた。試行錯誤を続ける中、2000年に新しい発色技術を確立する。銅板・真鍮板の表面に、独創的な赤色を着色することに成功したのだ。これにより幅広い分野での商品開発が可能となり、2008年に今の社名に変更、2017年にはオリジナル商品「ORII MARBLE」がグッドデザイン賞を受賞、2021年には低迷時の約7倍にまで売上げを伸ばした。

伝統技術を活用してさまざまな商品を生み出す「Orii」では、技術の継承にも積極的で工場見学や着色体験ができる。今回、編集部では「銅板トレイ」の着色に挑戦した。

まずは渡されたトレイ全体をやすりで磨き上げ、糠（ぬか）をお好みの分量で塗り付ける。続いてはトレイを焼きつける工程。大きな音を立てて炎を吹き出すバーナーをしっかりと握り、トレイにまんべんなく焼き目をつける。水に浸して焦げた糠を落とすと、不思議な模様が浮かび上がってきた。その後、トレイに鮮やかな色の薬品を丁寧に塗り付け、タンクから立ち昇る気体にかざすと、部分的に美しい青色に変化していく。仕上げは工場の方におまかせして、素敵銅板トレイが完成した。取材班4名で体験したのだが、緑青の見え方がそれぞれ違っていて並べて見るだけで楽しい。製品ひとつひとつに個性が出るところも、銅着色の大きな魅力だ。この着色体験には子どもたちも多く参加しているとのこと。「Orii」が守り、進化させてきた伝統技術は、着実に次世代へと受け継がれている。



取締役統括マネージャー
櫻野 祐一 氏

〈委員長〉高梨友宏(三菱マテリアル株)
〈委員〉釜山/和田久行(バンパシフィック・銅板株)、吉本俊(日本銅業協会)
伸銅/宇佐見隆行(古河電気工業株)、原田宗和(株神戸製鋼所)、根本優一(株)日本伸銅協会
電線/斎藤春彦(株フジクラ)、前田かおり(株)日本電線工業会
〈(株)日本銅センター〉桑山広司、中山宏明、宮本和法、波多野英明、岩谷恵美子

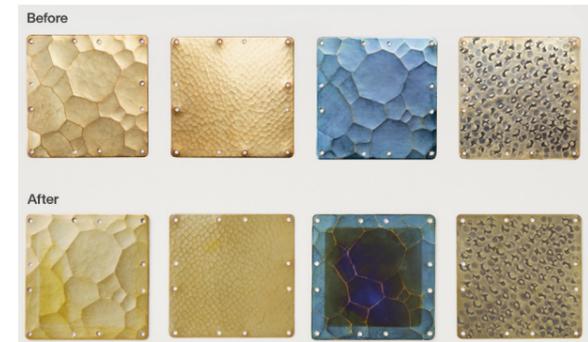
伝統工芸と技術開発の街と実感しました。宇宙空間にさらした銅板「宙花」。表面観察等の化学分析を行っていない純粋なアート作品です。今年も自由研究コンテストを開催。表彰式後、「他の受賞者の研究内容や発表方法を見て刺激を受けた」など、多くのメールをいただきました。弊センターは設立60周年を迎えました。今後も銅に関する情報発信に注力してまいります。編集デスク 小澤 隆(日本銅センター)

Topics 宇宙空間にさらした銅板 アート作品『宙花(そらばな)』

2024年11月18日～22日の5日間、東京・日本橋でアジア最大級の宇宙ビジネスイベント「NIHONBASHI SPACE WEEK 2024」が開催された。日本橋エリアの複数の会場で、国内外の政府、宇宙機関、学術団体、民間宇宙ビジネスなど、100以上の企業・団体が参加する大規模なイベントだ。この中の展示のひとつとして、銅板を使用したアート作品『宙花(そらばな)』が展示された。

『宙花』は、宇宙空間に3ヵ月さらした銅板を地球に持ち帰ってアートにするという壮大なプロジェクトで誕生した。作品を手がけたのは、宇宙産業の総合的なサービスを展開するSpace BD株式会社。本誌前号にご登場いただいた株式会社ウチノ板金の和國商店との共同企画だ。株式会社玉川堂が銅板を提供し、デザインは隈研吾建築都市設計事務所が監修するという、豪華なコラボレーションが実現した。

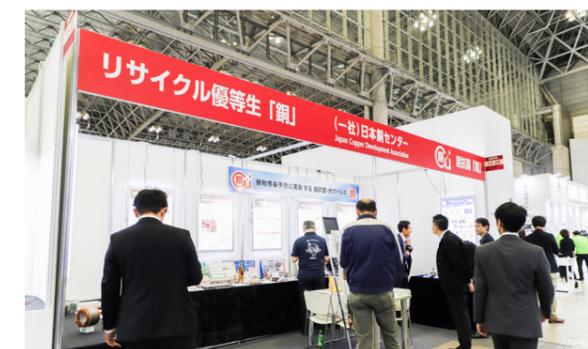
Space BDはこれまでもさまざまなコラボレーションを通じて、記念品をISSへ輸送し地球に帰還させるといったプロジェクトを展開してきた。そして今回、和國商店の内野友和氏との出会いによって銅板を宇宙に送り込む企画が立ち上がる。銅板を提供した玉川堂は、新潟で約200年にわたり鋳起銅器の製造を手がける金属加工会社だ。「鋳起銅器」は1枚の銅板を鋳で叩き起こして銅器を製作する伝統技術で、2010年には5代目当主の次男・玉川宣夫氏が、人間国宝(重要無形文化財保持者)に定められた。隈研吾氏のデザインによって新たなアートとして生まれ変わった4枚の銅板は、絶妙なバランスで緑青銅板の上に並んでおり、まるで宇宙空間を漂っているようだ。展示会場を訪れた人たちは、ガラスケースに収められた唯一無二のアートピースをさまざまな角度から眺めていた。「遠いイメージの宇宙をより身近に感じて頂く機会になると嬉しい。今後もあらゆる形で宇宙の一大産業化にチャレンジしていきたい」、Space BDの赤井澤京平氏は会場でそう話してくれた。今回の企画で実現した宇宙と銅板との幸運な出会いが、銅の新しい可能性を生み出すきっかけとなるかもしれない。



News 「第11回メタルジャパン(高機能金属展)」に出展

日本銅センターは、日本伸銅協会と共同で2024年10月29日～31日、幕張メッセで開催された『第11回高機能金属展-METAL JAPAN-』に出展した。展示内容は「銅の超抗菌・抗ウイルス性能」「銅のリサイクルの現状」「銅素材・加工品に関する最新情報」。

超抗菌性能の解説及び評価試験結果等のパネル展示、日本銅センター独自の銅の超抗菌性能基準を満たした「CU STAR 認証製品」と関連の研究を行っている大学の開発品を展示。また、リサイクルについては、銅資源を有効に活用するための「資源循環システム」の現状と、日本銅センター独自で調査を行った「銅のフロー図」を中心とした銅のリサイクルに関する展示を行った。



編集後記
本号では、家電リサイクルの事情、高岡銅器の新しいかたち、弊センターの取組とトピックスをご紹介しました。家電リサイクル工場は、製品を効率よく安全に解体・分別を行い銅のリサイクル原料を得る、資源循環の一役を担う重要な工場でした。伝統ある高岡銅器。確かな加工技術を元に、時代にあったデザインの製品を生み出す熱意を感じました。また伝統技法の「銅の着色」を体験、高岡は